

## 寛容について 其の二

——キリスト教教育の在り方の

基礎にかかわる問題として——

関 屋 光 彦

前号に於て私は、考察の主題は「宗教的寛容」の問題であること、それを新教的世界について見ようとするのであり、先ず信者相互間に於ける寛容の状況如何の考察の必要ある旨を述べた。その際に私の立脚点は——申す迄も無きこと乍ら——現代の精神状況下に於ける日本という地盤であることを断っておいた。

さて新教的世界に於ける寛容の問題を考えるための好個の一例として、私は先ずリンコーンの生涯の途上に起った一出来事を彼の宗教観との関連に於いて挙げたいと思う。此の事例は年代的には一世紀の距りを有っているが、現代に於ける寛容の問題に含まれている様な諸要素を含み、その意味に於いて現代的意味を十分に有っていると解されるのである。これに就いて記して問題考察の手がかりとし、次いで現代に至る迄の若干の事例を取上げることとしよう。

寛容について

リンコーンは三十三歳の折り——それは彼が八カ年のイリノイ州州会議員の職を了えた時のことであったが、——国會議員候補者として出馬せんと意向を有った。然るに候補者としての指名を受けようとの彼の努力は教会の人々の画策による反対運動に依って阻まれて失敗におわり、彼は此の機会には立候補すらも叶わずに終った。その反対理由は主として彼の思想傾向に在り、即ち彼の信仰が正統的ならず（或いはむしろ「彼はクリスチャン」ならず）と考えられた事にもっぱら基くもの如くである。彼はその後間もなく人に与えた手紙に次の如く述べている。

「ここにも亦、教会の影響に依る私に対しての奇怪至極な共同作戦が在った。いたるところで次の様に言い立てられた、『如何なるクリスチャンと雖も彼に加担すべきでない、何となれば彼は何れの教会にも属して居らず、理神論者と考えられ且決闘をする<sup>(1)</sup>と話したことがあるから』と。

ところで彼の宗教思想又は信仰がどの様なものであったか、之については彼の生涯を通じての行状並びに彼の数多き公文演説等を通じて窺い知ることが可能であるが、彼自身その後半生の或る機会に信仰の問題について積極的に見解を表明している言葉が有り、之に拠って考えてみるのが捷徑且適切であると思う。

「私は曾って如何なる教会へも自分を結合させることをしなかった、というのは私は、若干の留保無しには『信仰簡条』や『信仰告白』を特徴づけている彼のキリスト教教理の長く且複雑なる陳述に同意する事に困難を感じるからである。若しも如何なる教会でもが、会員たるの唯一の資格として、律法並びに福音の精髓である主の述べられた簡潔な言葉『なんじ心を尽し、精神を尽し、思を尽して主なる汝の神を愛すべし、又おのれ

の如く汝の隣を愛すべし』<sup>(2)</sup>をその聖壇に刻銘するとすれば、その教会に私は心を尽し精神を尽して欣然参加するであろう<sup>(3)</sup>と。

彼の数多きそして不朽の価値をもつと謂われる公文演説の内にも、屢々彼の衷心に存した宗教信仰の表白と見らるべき数多の言葉が見出されるのであるがそれ等はさておき、比較的公式張らぬさりげない折りになされた、彼の人間性の<sup>ほとは</sup>進しりを見せている一小演説を掲げて彼の平常時の宗教的な態度のあらわれを見ようと思う。彼が第一回目に大統領に選出されて、南北戦争勃発せんとする二カ月前の緊迫せる情勢の裡に、第二の故郷とも云われるべきスプリングフィールドを離れて首都ワシントンに向わんとする際に、出立を見送りに来た町の人々への別れの挨拶の言葉である。(茲には彼の信仰を考察するに必要な一部分のみを引用する)

「∴私は今旅立たうとしている、ワシントンの肩に置かれたよりもより大いなる課題を自分の眼前に有ちつつ何時、又は果して、戻って来られるかどうか判らない。かつて彼(ワシントン)を助け給うたかの聖なる方<sup>かた</sup>〔神〕を指す)の祐助<sup>たすけ</sup>なしには、私は成功することは出来ない。その祐助<sup>たすけ</sup>有らば、私は失敗をなし得ない。私と偕に往き諸君と偕に残りそして善きことのために何処にも在し得給う彼(神)を信頼し奉って、凡ては矢張り旨くゆくことをかたく希望しようではないか。諸君が私のことを、諸君の祈りのうちに、お委ねして頂きたいが、その際に私も彼(神)の配慮に諸君をお委ねして、私の心からなるお別れの挨拶と致します<sup>(4)</sup>。」

数多き資料に徴するに及ばずとも、上記二個の引例に依り、リンコーンが聖書に示されたる人格的な神に対する純真なる信仰を抱いて居ったことを否むことは出来ない。之等に鑑みて、最初に記した彼の国会議員立候補に

失脚の出来事の際における、彼が理神論者であるとか非基督者であるとか見做されたことの妄断甚だしきものであったことが明らかである。此の小演説に於いて見らるる彼の神に対する関係は、生き生きとした信頼に満ちたそして牢固たるもののある事を感じしめられる。又之に先立って記した彼の信仰に関する見解の表明は、彼がしかの教義教理の把持よりも神への愛に、そして隣人への愛に現実に生きる事のいかに肝要であるかを意識していたかを明示している。それ故に私は、最初に記した教会の反対、そして彼が使命と感じ更に踏み出そうとした政治生活の上に甚しき不利益を蒙った事実には、顯著なる不寛容の事態を認めない訳には行かない。

之を或る人は一世紀前に在った単なる一歴史的的小事実と見做すかも知れない。しかしその意味する所は小さくはないのであり又現代に無縁ではないのである。形式的信仰と宗教的生命の実存との喰い違いであり、其処に生起した不寛容の事態である。此の様な喰い違いと其処に起る不寛容、それは現代のキリスト教界、新教的世界に於ける問題性たり得る所のものである。次に斯様な問題性を含んで居る事例を現代に於て考えて見よう。日本に於ける事例を挙げるに先立ち西欧に於ける一事例を取上げて見る。

アルベルト、シュヴァイツェルの場合である。彼が「三十歳迄は」と思い定めた医学の勉強を予定の如くに完了、意図したアフリカに於ける医療伝道の業に愈々取掛ろうとした際のことである。その目標に向って諸般の準備を進めていたが、彼は一つの難関に逢着した。(以下野村実著「人間シュヴァイツェル」<sup>(5)</sup>に拠る。)

「準備の最後に来るものは、パリ―福音伝道協会に自費を以てラムバレーネに医療奉仕をしたい希望を申出て、協会の許可を求めることであつた。

協会の会長は彼の申し出を喜んだが、役員一同は彼の特異の神学がアフリカで働いている宣教師らを困らせないだろうかと案じたので、信仰の試験をしようと計画した。これに対し博士は主張した。イエスが使徒を召し給うた時には、彼のあとに従おうとする意志のみを要求したではないか。黒人の病苦をいやすために伝道事業に協力を申出るのは、マホメット教徒であっても拒む理由はない。『我に逆わざるものは我につくものなり』と。こうして試験は拒絶された。博士が医師の道を選んだのは、もともと『しゃべらずにすむ』からであった。かれは『鯉のようにだまって』単に医者として働きたいのだと断言し、かたくなな役員らを安心させた。<sup>(5)</sup>

出来事の概要は以上で明かである。(その経緯の詳細については、ジョージ・シーバー著「アルバート、シュヴァイツェル」<sup>(6)</sup>に拠り知ることが出来た) 世紀の稀有なる存在として現在全世界の人々から真実なる尊敬を寄せられ、高齢にも拘わらずなおアフリカの地に活動を続けているシュヴァイツェルにも上記の様な「宗教的不寛容」を蒙らねばならぬことが有った。彼の十年來の祈りの中に示された聖なる企図、高潔にして献身的な志も実行の直前の段階に於て正統的信仰を以て自任する協会役員達の批判を浴び、阻まれるやも測られぬ様な事態に立到った。彼の信仰に根ざした毅然たる確信と機智に富んだ対処の仕方に依って、よく此の難関を切抜け所期の目的に向って進むことが出来たのである。

上記は今世紀の早い頃の出来事であったが、なお今日に於ても「シュヴァイツェルは果してクリスチャンかの問いが持出され、一部に否定的見解が公言せられている。野村氏は前掲小著にその事を指摘して居られるが、私も三年前日本の新教教派の或る神学者である牧師の口から「シュヴァイツェルは結局ヒューマニストである」

との断定の有った事を耳にしている。野村氏は内村鑑三門下のクリスチャンであるが、夙にシュ博士と親交を有ち一昨年アフリカに赴き約五カ月間博士の医療事業に協力し親しく博士の人間に接して来た。帰朝後昨年三月東京神田に催された基督教講演会に於て「シュヴァイツェル博士を訪ねて」と題する講演をされたがその際にも、「シュヴァイツェルをクリスチャンではないと言う神学者があるが以下私の話す処を以て事の真否を判断して貰いたい。」と前置きして語られたのであった。

私も神学的にはシュ博士の思想信仰が十分論議の対象とされる所以を了解出来る。しかしその事が直ちに「彼はクリスチャンではない」と云うことにはならないと思う。論者の見解を以てすれば「彼の信仰は異端的である、それ故彼はクリスチャンではない」と云う事になるが「クリスチャンではない」という事はその人を教界から締め出すことであり、教界に於けるその人の立場を認めないことであると思う。以上は西欧における現代新教世界に見られた「不寛容」の一事例であるが、更に日本に於て状況はどうであるか、それを事例に拠って考えて見たい。

日本に於て、同信の者から甚しく苦しめられた例として、先ず内村鑑三の場合に想到せざるを得ない。が、彼が「不寛容」を蒙った数多くの具体的事実の一例を見るに先立ち、斯様な体験の中から彼が「寛容の問題」について述べている一文があり之に依り内村の宗教的自由、信仰の自由への積極的主張が見られると同時に、それは過去の日本に於ける教界の「不寛容」の状況を示す適例とも考えられるので、原文の最初の一部をそのまま引用することにする。

## 余の耐へられぬ事<sup>(?)</sup>

余に一つ耐へられない事がある、その事は、人が他の人を己れの宗教に引き入れんとする事である、余は大抵の事には耐へられると思うが（神の恩恵に由って）、しかしながらこの事には耐へられない、余はその人の奉ずる宗教が何であろうが、その事を問わない、しかしながらいづれの宗教にしても、人を己れの宗教に引き入れんとする事は余の耐へられないところである。余はこの事をなす人に向って、余の救い主イエス・キリストの言葉そのままを發せざるを得ない、すなわち

ああ汝ら禍ひなるかな、偽善なる学者とパリサイの人よ、そは汝らあまねく水陸を歴巡り、一人をも己が宗旨に引き入れんとす、すでに引き入るれば、これを汝らよりも倍したる地獄の子となせり（マタイ伝二三の一五）

信仰自由は人の有する最も貴重なる権利である、この権利にくらべて財産所有の権利の如きは実に軽いものである、余はもし人ありて余の所有の物を奪うこととありとするも、余は彼をゆるすことができる、或いは余の名誉を傷つくる者ありとするも、余はさほどにその事を心に留めない、しかしながら余の信仰自由をすこしなりと侵す者があれば、余はその者に向って余の大なる聖憤を發せざるを得ない、彼なる者は、朽ちるこの世の物を奪わんとするにすぎない、然るにこれなる者は朽ちざる靈魂を奪はんとする、宗教勸誘は、詐欺、窃盜にまさるの罪である。

而してかかる罪人は世に少ないかというに、決してそうではない、余輩の見るところを以てすれば、宗教家という宗教家は大抵はこの種の罪人である、彼らは、人を己れの宗教に引き入れる事は悪い事であるということを知らないのみならず、かへってこの事を善き事であると思うて居る、善き事であると思うに止らない、彼らの信ずる神や仏の最も喜び伝う事であると思うて居る、彼らは神を見ること昔の武士がその殿様を見し如く、他の殿様の領分を侵しその家来を誘い来て己が殿様の家来とする事がこの上もなき忠信であると思うて居る、伝道は彼らにとり信者のとり合いである、多く信者を作る事、その事が伝道の成功である、教会に最も忠実なる者は、最も多く他の教会の信者を奪い来りて、これをその会員となしたるものである、彼らの信仰なるものはこの世の愛国心とすこしも異ならない、彼らは帝国主義を彼らの伝道に応用し、全世界の人を駆って己が教会の会員となさんとする。

此の文章に続く部分に於て内村は、信仰者の取るべき正しき態度、伝道の在るべき姿（如何なる場合に信仰を表白すべきか）を明かにし、信徒相互間の関係は相互の宗教的自由の徹底的な尊重に立つべきものなるを主張してこの論を了えている。

斯様な彼の見解の表明と共に、かかる教界にとって革新的な言説を発せしめた因をなし之を裏付ける諸体験の中から、キリスト教教育に関連ある一つの事実を取上げて茲に叙べておく。それは「北越学館」事件と称せられるもので、内村が米国から帰り、新潟の北越学館に招かれ在任中の出来事であった。（一八八八年）この学校は当時の自由党の或る代議士が新潟組合教会牧師で女学校の校長をも兼ねていた成瀬仁蔵と共に設立したもので、師範予備校と英学校を併せた中学校であった。当時新潟に来ていた或る米人牧師を通じて多くの外人宣教師がこの校に招かれ全盛時は十一人も居ったという。ところで彼等は教育方針に於て事毎に内村と対立し激しい意見の衝突が絶えなかった。たとえば日本人にキリスト教を説くには仏教を知る必要があるとの考えから、内村は仏教僧侶を招き日蓮上人の講演を生徒にきかすべしと主張したが、キリスト教宣教師たちは一斉に之に反対し、前記成瀬牧師も之を支持した。この状態では外人教師も去り、従って英語教授が振わず、学校そのものも危険に瀕するとの理由で、大多数の教師の猛烈な反対に会い、内村はその年十二月職を辞し東京に引上げた、というのである。

之について内村は一九二六年一月十八日の「日記」の内に回顧して云う、「……新潟は自分が明治廿一年、米国より帰朝早々、旧北越学館仮教頭として赴任し、其所に組合教会並に其所属の米国宣教師十一人を相手にして



信仰の為に大いに戦った所である。時は京都同志社並に其校長故新島襄君全盛の時代であり、加之前の日本女子大学校長成瀬氏が、其時は信心深き基督信者であり、宣教師の弁護者として立ちし時なれば、自分の苦戦甚だしく、終に敗れて東京に舞戻るべく余議なくせられた。自分は誤って居ったかも知らざれども誠実一杯を尽した積りであったが、衆寡敵せず論争は全然自分の敗北に終わった。」<sup>(8)</sup>と。又別な箇所之に觸れて云う「私自身の生涯の経験によれば、かつて私は、敢えて仏教の僧侶をまねいて私の校長代理をしていた学校で講演をしてもらったことがある。外国宣教師たちは、今日に至るまで私のこの罪を決してゆるさなかった。かれらの或る者は親切にも、私がおのれ自ら犯せるその罪を悔いて、私はいまや温和な基督者となり、英米の宣教師たちの友であり、かれら同様に、仏教の不倶戴天の敵であるかの如く考えてくれる。然し事實は、仏教に対する私の態度は依然として同様なのである。私は實際キリスト教の宣教師の間にある時よりも、仏教の僧侶たちの間にいる時の方が、より自由であるのを感じる。もちろんこれらの仏教者たちは、私が基督者であり私をすすめて私のキリスト教を棄てさせることが決してできぬことはよく承知している云々」<sup>(9)</sup>

此の事件に関する資料の呈示は多きに過ぎたかも知れない。しかし之等を通じて事の真相が少しでも適確に把握せられん為であった。又先の内村の「宗教の自由」に関する主張及び之等の記述を通して明治より昭和に迄も亘る日本の新教世界の「不寛容」な精神状況の一斑が想察され得るかと思う。

以上略々時代の順序に従って挙げ来った教箇の事例に依り、西洋に於てもであるが日本に於ける新教の世界に、現代に至るまで「不寛容」な事態が随処に認め得られるし、その様な事態を惹き起す「不寛容」な心術そのものが決して失せ去って居らないということが理解せられたと思う。

斯く信者の間に於ける「不寛容」が現存し且現在の問題であるとして、筆者は如何なる狙らいを以て此の「不寛容」乃至は「寛容」を問題にするのか。先に「日本の地盤に立って」と述べて立脚点は明かにしたが、なお此の小論の標題に「——キリスト教教育の在り方の基礎にかかわる問題として——」との副え言葉を附する事により、志向する処を示した。ただし此の「キリスト教教育」という言葉の意味に就ては一言を要する。アメリカに於ては、此の語は、「宗教教育」という言葉と共に、日曜学校教育乃至は青少年の為の教会に依る宗教教育の意味に屢々用いられ又理解されている。しかし茲に「キリスト教教育」という場合は、その様な特殊の限定された意味にでなく、一般にキリスト教信仰に基礎をおく教育又はキリスト教的な人間形成の意味に使用される場合である。(筆者は伝道とか宣教の業をも、その活動が教育の観点から捉え得る範囲に於ては、キリスト教教育と呼ぶことが出来る)と考へる)ところで筆者達の教育又は人間形成に関する根本的見解は、今後の日本の教育又は人間形成——それは、民主主義教育乃至は民主的人間の形成を目標とするのであるが——は、それが全きを得る為めには、高く深き宗教的倫理的な世界観、人生観の基礎を必要とするものであり、筆者個人の見解としては、

聖書に拠る福音的信仰が、基礎として要請せられねばならないのではないかと考える。斯様な立場に立ち、キリスト教教育の語義を右記の如く解して、現今日本に於て行われているキリスト教主義に立つ教育、広くは宣教、伝道に眼を向ける時、かかる精神活動及び之に伴う事業の推進せられるに際し、常に留意されねばならぬ問題として、考察の主題である「寛容の問題」に逢着する。

かつて筆者は或る聖書集会に於てそこに参加した真面目なる求道の友の一人から質問を受けた。その人は約十年前東大に学んで西洋史学を専攻し、卒業後もその専門の研究に従事している少壮の学究である。その問いは「中世以降の西洋の歴史に於て、異端審問、宗教裁判、そして宗教改革後に於ても新旧兩教の間乃至はキリスト信者相互間に、宗教上の立場の相異に基く反目、争鬭、迫害の事実とそのきびしさ、残虐さを見る時、キリスト教の本質について疑念を挟まざるを得ないが、如何に考えるか」というのであった。之はキリスト教に関する疑問として屢々持出されるものであり、新しい問題ではない。ただこの人は、この集いの三、四ヶ月前身边に大きな不幸を体験し、信仰の問題について深く沈潜したいとの意欲を有って居たのであって、ただ知的な解決を得られさえすればよいとの動機でこの問いを寄せたのではなかったのであった。ただ過去のキリスト教の歴史のうち示された信者相互間の反目、不和、争鬭の事実を前にして、之より生じ来るキリスト教の信仰の本質への疑念を除去し得なかつたのであった。

信仰者自体の間に見られる、「不寛容」な事実と之を惹き起させる心術、之は本来義と愛とを本質とし、平和をもたらしべき信仰の信受を妨げることの如何に屢々であるかは、人の知るところである。新約聖書に記されて

いる。イエスの言葉、例えば

「ああ禍だ、君たち律法学者！ 君たちは知識の鍵をとりあげて、自分も入らず、また入ろうとする者の邪魔をするからだ。(ルカ伝十一章五二節)」とか

「ああ禍だ、君たち聖書学者とパリサイ人、この偽善者！ 君たちは人々を天の国から締め出して、自分が入らないばかりか、入ろうとする者をも入らせないからだ。(マタイ伝二十三章一三節)<sup>(10)</sup>」

などは右記の如き宗教者相互間の「不寛容」を衝き、それを厳酷に叱責している言葉とも解される。本稿「一」に漸を追って記述した信者間の「不寛容」の幾つかの事例を検し見るのみで既に看取せらるることがあろうが、信者間の「不寛容」は当該の宗教的真理への接近又は理解を妨げる悪しき「躓きの岩」と言い得られるであろう。カール、ヒルティが、その著「眠られぬ夜の為に(第一巻)」の一月一日の項に述べている以下の言葉も、キリスト教界に於けるこの事実の存在とその問題性とを指摘しているものと解してよいであろう。「しかしまた往時より現今に至るまで、萎縮した余りにも狭隘化したキリスト教も有る。これはキリストの本質と教えとに相応せず又は十分に相応せぬものであり、既に多くの高邁にして高き教養を有する人士を此の教えから遠ざけたのであった。」<sup>(11)</sup>と。

私は今「躓き」という言葉を使用した。新約聖書では、この「躓き」という言葉は二様に用いられている。「邪魔もの」「妨げ」「罪に誘うもの」等語意を有うが、その用いられ方に依って、当該の事象又は人自体が不真理、悪であって人を神から離れしめ乃至は墮落せしめる事に対し責任を負わねばならぬ場合と、これと反対に当

該のもの又は人々ではなくて之に接近し触れる者の側に責任がある場合の二種の用語法である。例えばルカ伝七章二三節のイエスの言葉「わたしに躓かぬ者は幸である(塚本口語訳)」とか、パウロの有名なコリント前書第一章の場合の如き、即ち「ユダヤ人はしるしを請い、ギリシヤ人は知恵を求め。しかしわたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える。このキリストは、ユダヤ人にはつまづかせるもの、異邦人には愚かなものであるが、召された者自身にとっては、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の力、神の知恵であるキリストなのである(二二—二四節、聖書協会口語訳)」などの場合は後者に属する。この引用文に於て、パウロは自分の宣べ伝えようする十字架の言葉、宗教の真理は、神、真理をおそれ畏かしこまぬ者、全き敬虔を欠く者に取っては「躓き」であり、おろかしきこと、邪魔物としか目に映ぜず、真理性は受け入れられない、と述べて憚らないのである。この場合の「つまづき」は、聖書の真理(キリスト、その十字架の贖い等々)が啓示の真理であるという本質上の理由に基くと考えられる。

しかし私が今、信者の「不寛容」を「つまづき」であると言った場合の「つまづき」を指すのであり、此の意味合いでの「不寛容」こそは宗教人の最も戒心すべきものであると思う。先に引用した福音書のイエスの厳しき叱責の言葉が宗教者達に対するものであったことは銘記せらるべきである。現代に於ける宗教人が、たとえ自らは啓示の真理、福音の担い手であると自任していても、いつしか生々たる宗教的生命を失い、教義、信条の使徒と化し、ヒルティーの所謂「キリストの本質並びに教えに相応せぬ又は十分には相応せぬ」状態に陥り、真理の証示者、イエスの僕である代りに、分派的精神の使徒になり変って居る場合があ

るのではなからうか。「その実で知られる」と云われるが本稿「一」に記述した实例に徴しても、斯かる形式化、独善化の心術の失せていないことは認められねばならぬと思う。本稿で問題としている「不寛容」の究極的原因は、斯様な「自己」又は「自派」を正当化せんとする心術に基づくのであると思う。

河合栄治郎氏はその著「寛容の思想に関する研究」<sup>(12)</sup>に於て、宗教上の迫害は現代に於ては西欧中世末期の様な形では跡を絶ったと言ひ得るけれども、迫害の心理そのものは依然人間の内面に存し、失せ去つてはいないと述べて後、この心理を五つの要素に分析しているが、その内最も根本的なものとして、次の事項を挙げている。之は私が右論じて來つた帰結と同一精神に立つものである。

「然し何よりも人を迫害に導くものは、自己のものを肯定し、他のものを否定せんとする自我意識であり、自己の優越の要求である精神的懶情性も不知なるものに対する不安も、未だ以て迫害と云う積極的行動に人を駆るには足りない。唯他人に屈せざらんとする自負心、他人を凌駕せんとする競争心、他人を屈伏せしめんとする虚栄心、之等は「寛容」と正反対にして「迫害」に赴くべき心理である。之等の主観的要求が無意識の裡に客観化され、正義、真理、信仰を自己の独占物となさしめ、之を背後に負うて反対思想の迫害を合理化せんとする……」<sup>(13)</sup>と。

単に宗教上の「寛容」だけにでなく、思想上の「寛容」についても、河合氏が迫害の心理の根本的なものと見做す要素は妥当するであろう。しかし事宗教に關し、之は全く肯察に當る見解であり、キリスト教界に就いても、右記述の中の「自己」或いは「自我」の代りに、「自分の所屬する教会教派或いは自己の抛つて立つ教義、神学等」

の語の何れかを以て置換える時、今日見られる信者間の「不寛容」の事態の原因はよく解明せられるであろう。

河合氏は基督者ではないし福音的信仰の信奉者でもない。しかし私は、此の様な言説に触れるに際し次の事を考えしめられる。即ち宗教信仰に立つ者は、自分の宗教、自派の信仰、教義に立たない人士、思想家の所説にも充分に傾聴する心構えを有つべきであり、汎く敬重するに足る人々、思想から刺戟と示唆を受け、反省を与えらるべきである。最近も筆者は、印度の副大統領ラダクリシュナン博士の来朝に除して此の感を深くさせられた。「東方と西方との思想の平和的協力」という題名で或る席上博士に依って為された演説は、翻訳に拠って一般に知られる様になったが、その趣旨の全き理解は、全文に於てなされねばならないけれども、茲には問題考察に關連を有つ箇所を以下引用する。

「……もしかして、私の国が消滅することによって、人類の利益が増進するということがあるとするれば、私はそれを歓迎しましょう。……」又「……自分たちは正しいのであって敵は不正なのであるとか、よしんば敵にも少しばかりは正しい点があるうとも自分たちはもっと正しいのだとかいうのは完全にまちがっております。いたい、そういう態度はわれわれのためにはなりません。謙讓こそが必要であります。」この様な言葉が、殊に一国の政治の指導的地位に在り乍ら、述べられているとき、著しくその言葉の重量を増し加える——演説は次の語を以て結ばれている。「私は……ふたたび強調したいのでありますが、これらのことのためには、精神革命が要求されます。またすべての個人を自己のはらからと見ることに、またあなたの敵の心の奥を見つめてそこに血肉のはらからを発見する透徹した眼が要求されています。われわれは光明と暗黒との対立を説くマニ教徒ではありません

せん。われわれは、われわれのすべてがその子であるところの一なる普通の神の僕であります。至上者によって捨てられ追われる民はありません。あなたは、あなたの最悪の仇敵のかけにも彼を守っている神の見えざる腕を見出すでしょう。もしわれわれがこのような態度を取るならば、そしてわれわれの日常生活のうちに、政治生活のうちに、国際関係のうちに、それを受け容れるならば、われわれは前方に歩み、現在持っているよりもはるかに善なる世界をもちうるということを、私は疑いません。」<sup>(14)</sup>

以上の引用だけからでも、人は之等の言葉の内に又それ等を通して、語り手の高くひろく且深い思想に触れて大なる驚きを覚え、現代の政治家の内に、しかも東洋人に斯様な思想の持主を見出すことに感なきを得ない。我々日本人としては、深き反省を促されるのである。しかし所感はとも角として、私は此の透徹した見解と確信の内に「寛容」の根本的な心術を見出す。寛容の問題解決の鍵は、帰するところ斯様な心術の存否に懸かると私は思う。宗教信仰に立つ者は、平信徒たると聖職者たるとを問わず、虚心に斯様な言説には傾聴し、斯様な考え方から大なるチャレンジを受くべきであると思う。

ラダクリシュナン博士はヒンズーの宗教信仰に立つ人の由である。曾つてキリスト教の神学校に学んだ事も有った。それ故キリスト教信仰の影響を蒙った処も尠くない様であるし、此の演説からも随所にその事が窺われる。しかし博士の信仰の立場はキリスト教から言えば「異教的」である。しかし乍らキリスト教の側に立つ者と雖も、斯かる宗教的実存に対し、払わらるべき敬意は十分に払わねばならないと思う。

私は博士の言葉を読み返す時、福音書中「山上の説教」の名で知られる及びその他のイエスの言葉を連想せし



められる。そして彼此対照する時、相通ずる思想を見出し、或いは前者が後者に基くものではないかとの念をも抱かしめられる。後者の関係箇所は周知のものも有り且比較的長文のものを含むから、此の本文中への引用は控え、註の欄に新しい口語訳に依り記述しておいた。

之等聖書の原文に接する時、原理的には博士の思想が決して新しきものでない事がわかる。にも拘わらずその主張に、新鮮なるもの、卓抜なるものを見出すのは何の故か。それは苦惱せる現代に在って問題解決の方向を指し示す宗教的実存に触れるためであると思う。

現代のキリスト教界に於て、聖書の真精神イエスの言葉の真義或いはより端的に言えばイエスの生命そのものが、之を信受する魂の隅々に迄も滲透し、之がその人の根源的な活力となって働く時、「寛容」は全うせられ、信者相互間の「不寛容」の問題も解消の途に就くと思われ。

キリスト教教育又はキリスト教信仰に基く人間の形成に際して、何よりも肝要であるのは、言う迄もなくその基礎を為すキリスト教信仰の正しき把持及び体得であり、福音の齎らす至純なる宗教的生命の信受に存すると思われるが、それは聖書を通し個人に至高者の霊の働きにより賜与せらるべきものであると信ずる。しかしてこの聖書に拠って立つ信仰、賜与せられたる宗教的生命は本質的に「寛容」の精神を伴うものであるとするのが、筆者の見解である。従って「寛容」の精神の欠如は信仰の本質、健全性をそこな書くことになる。「信仰の純粹性、獨一性」と「寛容」、此の両者は相対立し、相容れないのではないかとの疑問が提起せられるかも知れない。例えばパウロの「イエス・キリスト及びその十字架に釘けられ給いし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定

めたればなり（コリント前二の2）」とか、ピリピ書の「然り、我は主キリスト・イエスを知ることの優れたるために、凡ての物を損なりと思ひ、彼のために凡ての物を損せしが、之を塵芥のごとく思う。（ピリピ二の8）」等を捉え来って之は信仰の純粹性、獨一性を徹底に示している、その故にこの立場に立たざる他の者の信仰、思想を蔑視、拒斥していると言えるのではないか、との問いが生じ得るのである。しかし私は宗教人パウロが同じ、ピリピ人への書翰に於いて、反面健全なる常識人として、礼節を弁えた先達として、次の如き勸奨の言葉を与えているのを指摘したい。「終に言わん、兄弟よ、凡そ真なること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、凡そ潔よきこと、凡そ愛すべきこと、凡そ令聞あること、如何なる徳いかなる誉にても、汝等これを念え。（ピリピ四の8）」と、パウロは右引用の最初の二つに於ては、神、キリストと自分との関係（すなわち縦の関係）が純一無雜、ひたすらなる一すぢの信頼関係に立つものであることを闡明し又力説して居るけれども、それは決して排他、獨善を来らすものではないのである。却つて斯様な活きた至高者、贖いの主への徹底した信頼関係即ち信仰は、所謂「愛に依つて働く信仰（ガラテヤ書五の6）」なのであり、神の靈——聖靈——の働きの裡に於てある事象なのである。この聖靈は他の諸徳と共に「寛容」を招来するのである。しかして最後の引用に於ては、人間的な世界のことに（すなわち横の関係）に言及して居るのであるが、其処に於ては人は、凡そ人間として敬意を払うべきものごとに対しては、払うに吝であつてはならないこと、其処に列挙せられたる尊重することにともに対しては尊重の念をこそ有つべきである。ことを勧めているのである。即ち正しき信仰は人間の「人間らしさ」を害うものであるどころか、之を全うするものであるとの帰結を示している。

之等の考察から、信仰者に於ける「寛容」の在るべき姿は学び取られるわけであり、キリスト教教育又はキリスト教的人間形成に在っても、その根本をなす「宗教信仰の確立」という契機が、その主体性を害うことなしに、「人間的教養の尊重」という他のもう一つの契機と並び存し得るのである。否むしる後者は主体を為す信仰の担い手に刺戟と反省を与え、宗教的生命に潑刺と清新さを増し加え、信仰を硬化形式化独善化に陥らしめない重要な役割を有っているのである。この事は上記河合氏、ラ博士の言葉を取上げた際にも学び得た処であった。以上の様な考察とその帰結は、キリスト教教育の具体的な諸問題の在り方の規定に重大な関連を有つものであるけれども、小論の主題についての原理的な考察は為されたから、一応ここで稿を了えることとする。

#### 註

- 1 N. W. Sephenson, Abraham Lincoln, Encyclopaedia Britannica, 14th. ed., Vol. X IV, p. 140 に拠る。
- 2 マタイ伝第二十二章三七及三九節。
- 3 註1 掲出書同頁右欄。
- 4 The Life & Writings of Abraham Lincoln, ed. by Philip Van Doren Stern, pp. 635, 636.
- 5 野村実著「人間シュヴァイツェル」(昭和三十年刊岩波新書)引用文一八一—一八二頁。
- 6 George Seaver, Albert Schweitzer, The Man and His Mind, 1947. の第四章。
- 7 内村鑑三全集 第十三卷、二三八—二四一頁。(聖書之研究第一一〇号所載、一九〇九年十月)
- 8 内村鑑三原著 石原兵永訳「日本の天職」(角川文庫収録)石原氏解説の項、二〇八—二一〇頁に拠る。
- 9 内村鑑三全集第五卷、六〇一、二頁(英文)、一九二六年十月インテリシエンサー誌所載。引用文は右石原訳に拠る。
- 10 塚本虎二訳「口語「新約聖書」」第二分冊(昭和三十一年刊)二二〇頁、一三三頁。
- 11 Carl Hilty, Für schlaflose Nächte. 1905. S. 27.

12 前号註5掲出、河合栄治郎「贈訂社会思想史研究」所収。

13 右掲書 三六五、三六六頁。

14 岩波書店、「世界」第一三二号（本年十二月号）一〇九頁及一一一頁。

15 関係箇所を、註10掲出書に拠り、三つ掲げる。(一)一二三、一二四頁、(二)二二八 (三)一八二、一八三頁

(一)「あなた達が知っているように、世間では主権者が人民を支配し、また偉い人が権力をふるうのである。あなた達の間では、そうであってはならない。あなた達の間では、えらくなりたい者は召使になれ。一番上になりたい者は奴隷になれ。人の子が来たのも仕えられるためではない。仕えるため、多くの人の贖金としてその命を与えるためである。」(マタイ伝第二章二五—二八節)

(二)それから弟子たちに言われた、「罪の誘いが来るのは致方いたしかたがない。だが、それを来させる人は禍だ。この小さな者を一人でも罪に誘うよりは、挽臼を頸にかけられて海に放込まれる方が、その人の為である。注意せよ。もし兄弟が罪を犯したら、これを咎め、悔改めたら赦してやりなさい。あなたに対して一日に七度罪を犯しても、七度『すまなかった』と言って、あなたの所へ戻ってきたら、赦してやらねばならない。」(ルカ伝第一章、一—四節)

(三)「……しかし聞いているあなた達に言う、敵を愛せよ。自分を憎む者に親切をつくし、呪う者に祝福を求め、いじめる者のために祈れ。あなたの頬を打つものには、ほかの頬をも差出し、上着を奪おうとする者には下着をこぼむな。求める者は誰にでも与えよ、あなたの物を奪った者から取返すな。あなた達は自分にしてもらいたいと思う通り、人にしなさい。自分を愛する者を愛すればとて、どんな恵がただけよう。不信者でも自分を愛する者を愛するのだから。親切にしてくれる者に親切にしたからとて、どんな恵がただけよう。不信者でも同じことをするのだから。また取りもどすつもりで貸したからとて、どんな恵がただけよう。不信者でも同じものを取戻そうとして、不信者に貸すのである。しかしあなた達は敵を愛せよ、親切をせよ、何も当あてにせず貸しなさい。そうすれば褒美をどっさりいただき、かつ、いと高きお方の子となるであろう。いと高きお方は恩知せず悪人にも、憐み深くあられるのだから。

- あなた達の父上が慈悲深くあられるように、慈悲ぶかくあれ。裁くな、そうすれば裁かれない。罪に落すな、そうすれば罪に落さない。赦してやれ、そうすれば赦される。与えよ、そうすれば与えられる。押しつけ、ゆすり込み、こぼれるほど量りはかりを善くして、懐に入れていただけであるう。はかる量りで、あなた達も量りかえられるからである。」なを譬を一つ話された、「盲人に盲人の手引ができるか。二人とも穴に落込まないだろうか。弟子は先生以上になれない。りっぱに一人前いちにんまえになっても、先生のようになるだけでせる。なぜあなたは、兄弟の目にある塵が見えながら、自分の目に梁はりがさるのに気付かないのか。自分の目にある梁が見えずに、どうして兄弟に向って、『兄弟あなたの目にある塵を取ってあげよう』とすることができようか。偽善者！ まず自分の目の梁を取ってのけよ。その上で、兄弟の目にある塵を取ってやったらよからう……」ルカ伝第六章二七—四二

16 ガラテヤ書第五章五節。

17 全 右 第五章二二節。